

ICTの

Information and
Communication
Technology



好きな場所で好きなときに欲しい情報を収集し、仲間と共有したり、世界へ発信したりする……
インターネットを中心としたICT（情報通信技術）は、コミュニケーションの可能性を大きく広げてくれます。
しかしICTには、利便さだけでなく、トラブルの原因や犯罪の道具になりうる負の一面があることも忘れてはいけません。
今号の特集は、それぞれの立場でICTと関わる塾生や教員が、その光と影に焦点を当てます。

好奇心と 実践力

— ICT社会の情報リテラシー —



環境情報学部 教授
小川克彦

おがわかつひこ
小川克彦

スマホを鉛筆のように使いこなし、友達とツイッターでおしゃべりし、YouTubeで音楽を聴く。物心ついたときからネットのある若者は、こんな生活を当たり前に考えています。それ

は親の世代が電話やテレビに感じたことと同じです。

ネットはリベラルなメディアです。テレビや新聞と違って、ネット情報の大半は、公にチェックされているわけではありません。ときとして倫理にもとることもあります。犯罪はもちろん、悪意や悪戯を見分けられるようになることが、ネットを楽しく安心して使うための基本だと思えます。ただ、自分は「良し」と思っても、使い方によっては「悪し」になってしまうこともあるのです。

ある授業のレポートで、他人のブログをコピー（コピー・アンド・ペースト）し、「私はこれと同じ考えです」と記した学生がいました（ちなみに、その学生レポートの評価は不合格にしました）。ネットは情報の宝庫です。探せば自分と同じ考えが見つかるかもしれません。でも、それはほんとうに自分の考えなのでしょうか。

ツイッターにはRT（リツイート）という機能があります。他人が投稿したツイートをさらに自分が再投稿するしくみです。通常は、自分や他人の参考のため、と思ってRTをします。ただ、東日本大震災のときに、放射線の

被曝を防ぐにはヨードチンキを摂取するのがいい、というようなデマがRTで蔓延したことがあります。内容の是非を確かめず、他人のツイートを鵜呑みにしてRTをする。役に立ちそうだが、他人に知らせたい、という思いは善意だったかもしれませんが。しかし、内容ではなく、その「記号」だけをコピーするという行為が、結果的に悪意につながってしまいました。

質問すれば何か答えてくれる「 구글先生」に頼る学生もいます。でも、大半の人は検索結果の最初の数ページしか見ません。多様さを特徴とするネットにもかかわらず、マイナーな意見はおきざりにされています。便利で簡単な道具に流され、情報を発し探すのは人間であることを忘れてしまったのです。

ネット時代の情報リテラシーは、道具が変わっただけで、本質は福澤先生の時代と同じです。何か疑問に思えば、納得する答えが得られるまで調べる好奇心を忘れてはいけません。授業でも研究室でも図書館でもネットでも、自分の目で確かめること。可能であれば、現場行って話を聞くこと。好奇心と実践力が、IT社会でもっとも大切な情報リテラシーではないでしょうか。

商学部「導入ガイダンス」と情報倫理の基礎知識



商学部 教授
導入教育運営委員会委員
種村和史
たねむらかずふみ

商学部では、新入生がよりスムーズに大学環境に溶け込めることを目的に「導入ガイダンス」を始めました。今年度は2回目で「メディアリテラシー」「コンピュータリテラシー」「メンタルヘルス」「薬物乱用の注意」「男女共同参画」「福澤諭吉の男女交際論」のテーマで4月の土曜午後に行います。「コンピュータリテラシー」では、まず塾内に整備されたさまざまな情報インフラを紹介し、それらを活用して情報にアクセスする方法を説明します。同時に、インターネット利用時に守るべき情報倫理についてしっかりと伝えます。

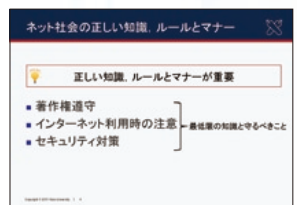
新入生のコンピュータ、インターネットへの習熟度はさまざまですが、たとえ高いスキルを持っていても、便利さの裏側にある危険への想像力と責任の自覚は決して高いとはいえません。

※ SNS = Social Networking Service

大学生になると社会的には大人として見られます。それゆえに、これまで以上にルールを守り、人間関係においても大人としてきちんと対処することが求められます。

ガイダンスではアカウント名とパスワードの管理の重要性から、著作権遵守、ソフトウェアの不正使用禁止、フィッシング詐欺の注意喚起まで、犯罪の被害者や加害者にならないために、インターネット利用時の注意を促します。また、多くの塾生が利用しているSNSやブログについても言及します。ツイッターやフェイスブックなどに気軽に書き込んだひとことが、他人を傷つけてしまったり、逆に誹謗中傷やストーカールの被害につながってしまったりするケースがあることは、利用の前提として知っておく必要があります。

高校と大学では生活環境が大きく変わります。大学生活を充実させるためには、ここで取りあげた情報倫理などの基礎知識を身につけ、自分があるべき大学生のイメージを初めのうちにしつかりと描いておくことが大切です。



ガイダンスの一部資料を慶應義塾ITCのwebサイトから見るができます。 <http://www.itc.keio.ac.jp/>



理工学部 電子工学科 4年

アブドゥル・ラズイズ・
ビン・ジュナイディ君

文学部 国文学専攻 4年

わたなべ
渡邊めぐみ君

環境情報学部 4年

てらやまじゅんき
寺山淳基君

座談会

便利だけれど危険もある ネットの使いこなし方

インターネットが当たり前にある時代に育ち、ツイッターやフェイスブックなどのSNSが生活に浸透している塾生たちの世代。今回は3人の塾生に、ネットの活用状況やネットに対し感じていることなどについてお話を聞きました。

専攻はたぶんネット活用率もずっと低いと思います(笑)。それでもSNSは確実に浸透しつつあり、私も遅ればせながら昨年7月からツイッターを始めました。個人的な使用のほかに、日吉メディアセンターの学習相談室のアカウントで相談員の一人として、「明日は文学部の塾生が相談を受けます」などの担当情報を流したり、小論文とレポートの違いなど多くの人が疑問に思うことをまとめたり、レポート作成に役立つ本の紹介をしたりしています。

寺山 質問に答えたりもするので、か?特に新生は、基礎的なことなど、面と向かっては聞きにくいこともツイッターなら気軽に質問できますよね。

渡邊 140字の制約がありますから質問に回答するツールとは考えていません。あくまで相談室利用のきっかけづくりのツールとして実験的に運用しています。

ラズイズ 僕はマレーシアから理工学部留学中。マレーシアでは小学生が普通にフェイスブックをやっているほどネットは普及していて、大学では教員と学生がフェイスブックを連絡手段にしています。現在は母国の家族や友人、大阪に留学中の親友とスカイプを

——はじめに、皆さんがネットをどのようなことに利用しているのかを教えてください。

寺山 ネット上での人のつながりを示すソーシャルグラフに、物理的な相関距離を表すという研究に取り組んでいます。距離の測定は、携帯などの端末

の受信強度をもとに行います。それを通じて推測するに、湘南藤沢キャンパス(SFC)ではツイッターやフェイスブックの利用者は、ほぼ100%。間違いなく生活の一部ですし、実際に

渡邊 ツイッターを使う授業もあります。それに比べると、私のいる国文学



使って話しています。スカイプは画面を通じて表情がわかるから、親は「ちょっと痩せたんじゃない?」「元氣そうな顔をしてるわね」などと、私の健康状態までチェックできて、安心しているようです(笑)。また、これから日本に来る後輩にアパートの情報など、いろいろとアドバイスするのにも使っています。ネットがあれば世界は狭いですよ。

ネットにのせた発言や写真は全世界にさらされる

——情報を伝えるにも、情報を得るにもネットは本当に便利です。しかし、一方でネットを通じてトラブルが起きることもあります。身の回りで困ったことが起きたケースはありますか。

寺山 周辺ではいろいろとあります。よくあるのは、それに至った経過が考慮されずにある発言があげつらわれ、いわゆる炎上になってしまったりか。まず自覚しなければならぬのは、言葉でも写真でも、「ネットに上げるということは、全世界にそれを公開することになる」ということです。親しい友達だから、ブロックがかかっているからといって、友達が不用意に他に

流すかもしれないし、ブロックも決して完璧ではありません。世間にさらしてまづいことは、ネットにのせないことです。SFCはネット普及が早く、トラブルも多かったのですが、このところずいぶんと落ち着いてきました。危うさが認識され、ルールやマナーが浸透してきたのだと思います。

渡邊

ネットストーリーカーにもご注意ください。書き込みのひとつひとつにしっかりと反応されて、怖くなってツイッターをやめたしまった例もあります。また

情報収集にもネットが便利なのは確かですが、不確かな情報も多い。鵜呑みにしないで他の情報源や本にあたってくださいと確かめる癖をつけることが大切です。クリティカルリーディングとは、文章を読むときに批評や疑いの視点をもちことです。ネット情報の場合はさらにこれを強化する必要があります。またレポートに引用するときは、信用できる公式な出典もから引用するのはもちろん、取得日時を明らかにしなくてはなりません。ネット情報は常に訂正、改変されていますから。**ラズイズ** リンクをつけるのもいいですね。たとえば同じような情報がたくさん流れてくると信じたくなくなります

が、元は誰か一人が流したもので、それが増幅されているだけということもあります。また、マレーシアでも同じですが、ネットにはまり込み過ぎて、一日中画面を見続けている人がいます。意識的に距離を置くようにしないと、ネットにのみ込まれる危険があります。

渡邊

集まって話しているのにスマホ画面から目を離さない、いや離せないのかな、そうならちよつと怖い。ネットはネット、生活の基盤は、話す、聞く、見る、感じるなど実際の空間にないともずいずいですよね。

寺山

ネットはこれからも進化していくと思います。しかし実空間のコミュニケーションではありません。SNSを研究している者として、ネット上の情報と実空間の情報を健全に融合させる仕組みをつくることを考えていこうと思っています。

——ネットは、便利さの陰に危険も潜んでいます。うまく使いこなしたいものです。大学生活では高校時代以上にネット活用の機会が増えます。先輩塾生は、新入生に、勉強や生活に生かしながらも危険を避ける、正しいネットの活用方法を伝えてくれることを期待しています。



個人が広く、早く情報を発信できる新たなメディアの発展は、従来のマスメディアによる独占的な発信力を背景とした、世論形成の在り方にも変化をもたらしています。ソーシャルメディアを通じて進展する「静かなる変革」について、東南アジア政治が専門の山本教授に聞きました。

ソーシャルメディアと東南アジア政治

2011年前半、世界の目は「アラブの春」にきざぎざとなった。そこではソーシャルメディア（SM）が政治を動かす力を目の当たりにした。その陰に隠れているが、SMが関連する形で、東南アジアでも静かなる変革が進展中である。しかも、SMは21世紀型市民の政治参加と社会運動の形態として定着している。

SMからみえる東南アジアの政治空間には二面性がある。第一は国内政治の文脈である。SMは政治政党と結びつき、政治を変える推進力となっている。権威主義的な政治体制を敷くマレーシアやシンガポールでは、SMが総選挙での野党の躍進の大きな原動力となっている。その主要因は、SM空間では比較的に自由な政治的発言が可能という事実である。また、タイ、インドネシア、フィリピンという民主化が進展している国では、SMは選挙でのメディア戦略の主役となっている。

第二に外交関係の文脈である。ここではSMがネット世論的に機能し、排他的なナショナリズムを促進する。2011年の事例では、タイ・カンボ

ジア国境紛争の事例が記憶に新しい。ヒンズー教寺院遺跡プレアピビアの帰属をめぐる断続的な戦闘と外交交渉の行き詰まりの背景には、ネット世論を無視できない国内政治事情が絡んでいた。

このように、SMは国内政治的には政治変革の動力としての市民と関係し、外交的には市民を内向きのナショナリズムの主役とする。前者の場合はSMが若者と一体として語られ、後者の場合は世代を超えた市民の声となる。SMの政治的影響力についての評価は一筋縄ではいかないし、SMという情報ツールが政治を変えたと断定することも難しい。

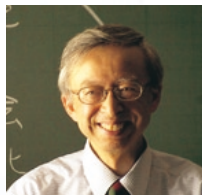
こうした点を確認した上で、それでも2010年代の東南アジアの国内政治を観察する際に、SMを無視することはできないと考える。なによりも東南アジア諸国では、民主体制のいかんにかかわらず、政党政治や議会政治、そして選挙に対する市民の信頼が高い。この事実があるために、新しい政治ツールとしてのSMからは目を離すことができないのである。



電子ネットワークが対人関係を変ええる？

総合政策学部 教授

井下 理



面の影響がある。新しい電子媒体やチャネルは、普及段階では便利な面が強調される。しかし広く普及すると今度は、それまで気づかなかった弊害が目立ってくる。

人と人が直接対面して、互いに真剣に話している状況にあっても電子ネットワークによるコミュニケーションは、人々の間に傍若無人に割って入る。

電子音が鳴り、それまで成立していた対面での直接の対話は無残にも遮断される。話し手が熱心に語りかけているのに、聞き手の眼がケータイに流れたり、話し手への注意が散漫になる。これは本来、失礼な態度なのだ。しかし、最近の私たちは、そうした状況にも慣れてしまっているのではないか。こうして、いつの間にか相手の話にじっと耳を傾け集中して聴く姿勢が希薄となる。他者との間に軽い会話はできてても深い対話するのは苦手とする人が増えてもおかしくない。

「Twitter」や「Facebook」など各SNSで「つぶやく」ときも、聞いても

らえなくても「気にしない」という建前がある。英語の「ツイト」はもともと「小鳥のさえずり」だ。それを日本語で「つぶやき」と言い換えたためニュアンスが変わり、「つぶやき」は、「ぼやき」になったり、愚痴であったりする。他者への伝達というより「独り言」に傾斜しがちな一面もあるのではないか。

新しい媒体はコミュニケーションのあり方に影響を与える。しかし、人と人がどういう関係を形成するか、その基本は媒体によって決まるのではない。電子ネットワークに依存したコミュニケーションは、その環境や道具を私たち人間がどう使うかによってプラスにもマイナスにも働く。功罪は道具に内在して存在するのではない。道具は、私たちの中にある不安や欲望、希望や甘えを増幅する働きをするに過ぎない。問われているのは道具や技術そのものではなく、それを使う人間の側である。

30年前の塾生間の伝達手段は、会って話すことを除けば、手紙や固定電話でした。しかし、今や塾生を取り囲む伝達ツールは高度化、多様化の一途をたどっています。「新しい電子道具」は、両刃の剣……。社会心理学・高等教育論が専門の井下教授の話をヒントに、自分なりの使い方を一度立ち止まって考えてみませんか。

新しい電子道具が私たちの生活を変えている。電子コミュニケーションの道具を使えば、「いつでも、どこでも、誰とでも」瞬時にして連絡がとれる。そこには便利な面と、不都合な面の両